

新卒助産師研修ガイドの作成

岩澤 由子、北岡 朋、加藤 優子、福井トシ子
公益社団法人 日本看護協会

平成24年度第26回日本助産学会学術集会

背景

平成21年7月の「保健師助産師看護師法及び看護師等の人材確保の促進に関する法律」の改正により、新たに業務に従事する看護職員の臨床研修等が平成22年4月より努力義務化された。それに伴い、厚生労働省において平成21年12月に「新人看護職員研修ガイドライン」が提示された。その後、助産師としての基本的な実践能力の獲得を目的とした研修についてガイドラインを作成する必要性が指摘され、平成23年2月に助産技術の到達目標等が「新人看護職員研修ガイドライン」に記載された。

しかしながら、新人助産師に特化した具体的な研修内容の提示としては必ずしも十分とはいえず、新人助産師が助産基礎教育終了後に経験を積み重ねていくためには、より実践的に「新人看護職員研修ガイドライン」を新人助産師研修として活用することが求められる。

そこで、日本看護協会では「新卒助産師研修ガイド」を作成した。安全・安心に院内助産システムを推進するためには、質の保証に向けた各施設での体制整備が重要であると考え、自己評価票としての「新卒助産師研修ガイド」を作成した。

実践内容

▶ 平成23年度「新卒助産師研修ガイド」作成に向けた体制づくり

「新卒助産師研修ガイド」の作成を、安全・安心な出産環境の実現に向けた整備の一環として位置づけ、産科医や病院および診療所勤務の助産師、開業助産師、助産基礎教育に携わる有識者10名による検討委員会と、助産基礎教育および臨床教育に携わる有識者5名によるワーキンググループを立ち上げた。

▶ 「新卒助産師研修ガイド(案)」を作成し、パブリックコメントを募集

厚生労働省による「新人看護職員研修ガイドライン」を基本として、日本看護協会の助産師職能委員会で作成された「助産師のキャリアパス(案)2010」、「助産実践のクニカルガイド(案)2010」、「医療機関における助産ケアの質評価(2007)」や、先行文献、書籍等を参考に「新卒助産師研修ガイド(案)」を作成した。

▶ 「新卒助産師研修ガイド」を策定

内容的妥当性を検討するため、日本看護協会および都道府県看護協会の助産師職能委員会を通じて「新卒助産師研修ガイド(案)」に関するヒアリングを実施。平成24年1月には日本看護協会ホームページに「新卒助産師研修ガイド(案)」を掲載し、パブリックコメントを募集した。収集した意見をもとに内容を修正し、平成24年3月に「新卒助産師研修ガイド」を策定した。

結果

本ガイドにおける新卒助産師とは、看護師経験のない、助産師免許取得後に助産師として初めて就労する助産師のことであり、新卒助産師研修とは、助産基礎教育で学んだ知識、技術を土台に、実践活動を通して助産師活動の基本的視点を形成するための基礎研修と位置づいた。この基礎研修は、助産実践能力(クニカルガイド)の初期段階を形成し、その後の助産実践能力を拡張させていくものである。

「新卒助産師研修ガイド」は厚生労働省の「新人看護職員研修ガイドライン」に対応する形で、「ガイドの基本的な考え方」、「新卒助産師研修」、「新卒助産師実地指導者の育成」、「新卒助産師教育担当者の育成」、「研修計画、研修体制等の評価」の5項目に整理した。また、都道府県看護協会や各施設での新卒助産師研修の事例をとりまとめ、新卒助産師研修の機会提供につながられるよう考慮した(図1)。

妊娠補補のような助産ケアを提供するべきか、その施設の機能や役割を踏まえ、その施設の助産師に求められる能力を明らかにしたうえで、新卒助産師の教育が行われなければならない。そのため、本ガイドでは助産師のコアコンピテンシーを中核に据えて、助産師の臨床実践能力の構造を整理したうえで、新卒助産師の研修について示した(図2)。

日本助産師会は、助産師に求められる臨床実践能力として「助産師のコア・コンピテンシー」のイメージ図を提示している。助産師のコア・コンピテンシーの要素として、倫理的感応力(ケアリング)、マタニティケア能力、ウイメンズヘルスケア能力、専門的自律能力を挙げている。本ガイドでは、助産師のコア・コンピテンシーにおける4つの要素の中に、日本看護協会助産師職能委員会が作成した「医療機関における助産の質評価 自己点検のための評価基準(第2版)」の評価基準の項目を整理した。

新卒助産師に求められる臨床実践能力は、看護技術の基礎的実践能力の習得が基本であり、看護師経験のない助産師は、看護基礎教育を土台として、基礎看護技術の臨床実践能力と助産師としての臨床実践能力を並行して獲得していく必要がある。また、これらの臨床実践能力は院内助産システムにおいて、医師と協働し自主的なケアを提供する助産師の基礎となるものである。助産師免許は看護師免許の取得を必須とするものであり、助産師としての臨床実践能力と同時に、看護師としての臨床実践能力も求められる。よって、助産師の臨床実践能力の構造は、看護職の臨床実践能力の構造に積み上げて構成されるものとした。

本ガイドでは、新卒助産師が1年以内に経験し、獲得すべき実践能力の到達目標を定め、到達速度を確認するチェックリスト例を示した。新卒助産師の行動目標は、倫理的感応力にあたるケアリングの姿勢を早期から育むことを前提としている。臨床実践としてはマタニティケア能力を中心に位置づけ、専門的自律能力の土台を形成できるように初期段階の目標を設定した上で、倫理的感応力(ケアリング)、臨床実践(マタニティケア能力:妊娠期・分娩期・産褥期・新生児期)、専門的自律能力(教育・研究・対人関係・倫理・管理)の3領域を示している。各3領域におけるGO(一般目標)・SBO(行動目標)の到達速度を確認するチェックリスト表をひとつの目安として提示している。

特に、平成23年8月に公表された「産科医療補償制度の再発防止に関する報告書」において、すべての助産師に分娩中の胎児心拍数聴取と新生児蘇生法の習得が強く求められたことをふまえ、産科医療補償ガイドラインおよび新生児の蘇生法アルゴリズムから、CTGOの判断とNCPRに関する到達目標を整理した(表1、2)。

平成24年1月には、日本看護協会ホームページに「新卒助産師研修ガイド(案)」を掲載し、広くパブリックコメントを求めた。意見収集の結果、特に「新卒助産師の到達目標」として、1年後の到達速度を確認する「チェックリスト」について、臨床や教育現場の有識者・実践者が具体的な意見が多数寄せられ、新卒助産師研修ガイドの内容や新卒助産師の到達目標がより明確になった。パブリックコメント期間の2週間、ダウンロード件数は約6,800件にのぼり、新卒助産師研修ガイドへの関心の高さが示された。

考察

新人看護師、新人助産師に共通する項目は、新人のときに受けた教育が、その後の職業人生に大きく影響するという点である。新卒助産師に必要な研修内容と到達目標の考え方や具体例を本ガイドにおいて示したことは、新卒助産師の質の標準化および向上に向けた研修体制の整備に向けて、大きく寄与すると考えられる。助産師としてのスタートが助産基礎教育の土台に積み上げられ、知識、技術、態度が確実な獲得できて、キャリアが形成される助産師のキャリアパスの出発点に、「新卒助産師研修ガイド」が位置づけられることを期待する。本ガイドを参考例として活用することで、各施設の状況に合わせた新卒助産師研修の整備の一助となる。

今後の課題

「新卒助産師研修ガイド」は新卒助産師教育に携わるすべての看護職のために作られる。本ガイドのもとに、施設ごとの特色に応じた新卒助産師研修が展開されることを望むものである。今後は本ガイドの普及を図り、新卒助産師に特化した新人研修システムの確立を啓発していく。なお、「新卒助産師研修ガイド」は、6月以降に日本看護協会ホームページに掲載する予定である。

厚生労働省 2010年度「新人看護職員研修ガイドライン」

- 2011年度 助産師に関する内容を追加
- 助産技術の到達目標
- 助産技術を支える要素および技術指導の例

日本看護協会 2012年度「新卒助産師研修ガイド」

- 厚生労働省の「新人看護職員研修ガイドライン」をもとに、具体的な研修方法を提示
- 都道府県看護協会や、新卒助産師受け入れ施設の研修体制を紹介

図1. 「新人看護職員研修ガイドライン」と「新卒助産師研修ガイド」の位置づけ

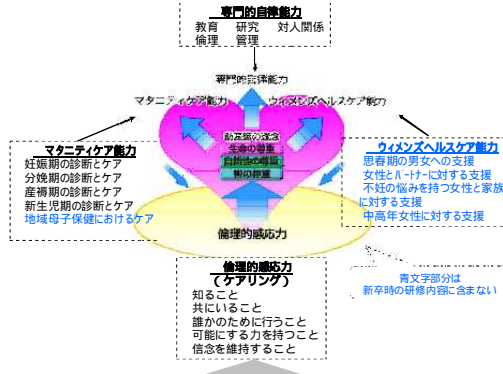


図2. 助産師の臨床実践能力の構造

引用) 日本看護協会 助産実践のクニカルガイド(案)2010
日本看護協会 医療機関における助産の質評価 自己点検のための基準(第2版)2007
日本助産師会 助産師のコア・コンピテンシー、2006

表1. CTG(分娩監視装置)の装着と判定に関するチェックリスト

GO(一般目標)	SBO(行動目標)	到達速度			
		1知識としてわかる	2演習でできる	3指導の下でできる	4一人でできる
CTGによる胎児心拍モニタリングの構造を理解できる	1 分娩後1期(人期時)にCTGを5分時間(20分以上)使用する。				4
	2 産婦人科診療ガイドライン(産科)・助産師研修ガイドラインに基づき、CTG装着の適応がわかる。				4
	3 継続モニタリングの適応がわかる(子宮収縮抑制剤中・分娩後2期・産褥期など)。				4
適切な装着と説明ができる	4 産婦に家でできるような状態で実施できる(セルフケアによる)。				4
	5 胎児心拍モニタリングの説明が実施できる。				4
	6 CTGの胎児心拍変動幅は30mm/分以下で読める。				4
ガイドライン(産科)・助産師研修ガイド(助産)に基づき、装着ができる	7 胎児心拍変動幅の観察ができる。				4
	8 胎児心拍変動幅と心拍数の変動がわかる(胎児心拍変動幅に応じた行動)。				3
	9 Reassessingの判定基準を理解し判断ができる。				4
モニタリング結果を適切に報告ができる	10 胎児心拍変動幅のレベルを説明できる(レベル1-レベル3)。				3
	11 胎児心拍変動幅が正常範囲にあり、その結果を説明できる。				4
	12 モニタリング結果を、適切に報告ができる。				3
モニタリング結果に基づき、適切な処置ができる	13 緊急発生時の実施時に、速やかに報告ができる。				4
	14 胎児心拍変動幅に必要十分な情報を適切に記録できる。				4

表2. <新生児期>のチェックリスト

GO(一般目標)	SBO(行動目標)	到達速度			
		1	2	3	4
出生直後の新生児のチェックができる	1 チェックポイント(呼吸状態、瞳孔・喉嚨・嚔、胎児状態)によって出生直後のチェックができる。				4
	2 出生直後のチェックポイントの全てが認められなければ、比準値を母体の近くで実施できる。				4
	3 出生直後のチェックポイントのいずれかが認められた場合は、医師および他の助産師に報告することとできる。				4
	4 出生直後のチェックポイントのいずれかが認められた場合は、新生児誕生の初期段階で実施できる。				4
	5 医師からの必要情報が理解できる。				4
	6 高度医療施設での問題点が理解できる。				4
	7 人工呼吸と胸骨圧迫の必要性が理解できる。				4
新生児期の蘇生法のチェックができる	8 必要時新生児蘇生法アルゴリズムに沿って、人工呼吸と胸骨圧迫が実施できる。				4
	9 蘇生法が実施できる。				4
	10 蘇生法に適切な説明や高度なケアを行うことができる。				4
	11 新生児期に関する緊急発生時・手順が活用できる。				4
	12 新生児の蘇生法に必要十分な情報が理解できる。				4
	13 新生児の蘇生法に必要十分な情報が理解できる。				4
	14 新生児の蘇生法に必要十分な情報が理解できる。				4
	15 蘇生法に必要十分な情報が理解できる。				4
	16 蘇生法に必要十分な情報が理解できる。				4
	17 蘇生法に必要十分な情報が理解できる。				4
	18 蘇生法に必要十分な情報が理解できる。				4
	19 蘇生法に必要十分な情報が理解できる。				4
	20 新生児の緊急発生時の対応と母親・家族への援助ができる。				4